

第四三四回 青葉会 令和四年六月二十三日(木) (於..赤坂飯店竹橋店 個室)

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵

佐藤ただしげ 豊田ゆたか 西澤國護 長谷見びん 星田啓子

投句・選句 小早健介 朱牟田恵洲 高橋康敏 土谷堂哉 中川雅夫 福島正明 古田昇

宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 高橋敏郎 橋口隆

早川允章 山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

九点 あめんぼう水面に映る雲を割る 孤舟 (紀・○そ・忠・五・と・清・敏・康・○盛)

走馬灯たたきに今も夫の靴 とみ子 (そ・紀・○忠・孝・清・○康・敏・啓・三)

八点 梅雨籠り壁にルオーのピエロの目 康敏 (紀・と・恵・清・允・昇・○啓・亜)

◎夏立つや鳶の天領広がれり びん (紀・孤・五・清・康・雅・三・盛)

七点 五月晴小惑星にアミノ酸 忠彦 (紀・健・と・千・龍・正・三)

笑ひ皺増ゆる日もありソーダ水 とみ子 (五・孝・ゆ・昇・啓・天・盛)

雨の夏至煙りて薄き摩耶六甲 健介 (紀・そ・く・た・ゆ・け・盛)

◎満持してこの大輪や今朝の百合 堂哉 (孤・千・孝・國・允・び・○亜)

装束を解きて鵜匠は好々爺 啓子 (紀・○と・○恵・清・堂・亜・け)

六点 嘶けば嘶き返す大夏野 孤舟 (紀・康・○堂・允・び・亜)

無住寺の池に華やぐ花菖蒲 昇 (そ・た・康・ゆ・雅・正)

◎何時の世も幽霊は美女夏柳 盛雄 (○紀・孤・健・千・恵・堂)

五点 耽美派は遠くなりけり谷崎忌 孤舟 (紀・健・清・敏・啓)

釣忍売る店もある駅の内 五郎太 (紀・恵・隆・け・天)

絵筆持つ麦藁帽で笑む遺影 堂哉 (そ・紀・び・允・昇)

四点 巳之助・老太郎らの「車引」

豪快に編笠飛ばす夏芝居 紀久男 (清・康・堂・雅)

◎シーボルトの妻の名つけし額の花 全 (孤・千・昇・盛)

金婚を祝ふ独酌冷酒で飲む 全 (忠・龍・○允・天)

踏めば鳴る上り框や梅雨深し 康敏 (紀・恵・正・啓)

◎青葉風鳥の鳴く音に癒されて ゆたか (紀・孤・孝・雅)

◎白鷺と谷の青さに浸りをり びん (紀・孤・忠・○孝)

朝刊のポストに落ちぬ明け易し 啓子 (紀・龍・允・亜)

夜遊びは酔歩のごとし蝸牛 盛雄 (紀・五・け・三)

地獄だよと孫吐き捨てる夏練習 天牛 (紀・そ・雅・び)

三点

梅雨に入る会へぬ友ゆえ長電話
 ふるさとを出でし日斯くも大夕焼
 殉教の島に攻め入る夜光虫
 夏霧の淡き色合ひ朝日焼
 ◎紫陽花を手向け祈らんオホーツク
 祝在位バッキンガムに風薫る
 南風や面狂富嶽の里帰り
 尼寺の踏減りし磴濃紫陽花
 ソプラノの余韻楽しむ夏夕べ
 影ゆれて我に語るや庭緑
 ◎オンライン顔声有れど心どこ
 どなたかな深いマスクとサングラス
 仕事師の鮎竿掛かる山飯場
 人気なきエスカレーター梅雨湿り
 ◎菩提樹の花の雨降る墓掃除
 亡き妻の笑顔艶やか桜んぼ

忠彦 (紀・敏・隆)
 孤舟 (健・敏・堂)
 全 (五・昇・け)
 五郎太 (紀・忠・ゆ)
 健介 (紀・孤・〇た)
 千恵 (紀・隆・〇昇)
 全 (紀・け・三)
 康敏 (紀・正・啓)
 ゆたか (紀・隆・正)
 雅夫 (紀・孝・〇三)
 國護 (孤・た・龍)
 全 (紀・ゆ・天)
 びん (紀・恵・盛)
 正明 (紀・五・雅)
 啓子 (孤・千・堂)
 規夫 (紀・と・國)

二点

猿之助・右近らの「猪八戒」
 京劇の殺陣に負けじと夏歌舞伎
 薄紅の睡蓮夕に花を閉ぢ
 湧き上がる水涼しげな清正井
 忘れ物二つ戻りし初夏の旅
 しばしの間蝦蛄の殻むく手眺む
 今年また白き紫陽花咲かす家
 番傘の名の由来知る梅雨入りかな
 山桜桃白い花から赤い実へ
 肌寒い小雨降る日に梅雨の入り
 わが狭庭揚羽蝶きて舞いて去る
 液晶画面いよいよ見辛く梅雨に入る
 御開帳香炉の煙り山緑
 ◎雄は飛び雌は待つてる螢かな
 騒がしや溪流釣りの解禁日
 大粒の青き梅の実紅ほのか
 父の日や権威低下もまたよろし
 郵送で祓え受くるも夏越かな

紀久男 (け・天)
 忠彦 (千・敏)
 全 (紀・た)
 五郎太 (紀・隆)
 全 (紀・啓)
 千恵 (忠・び)
 全 (紀・〇正)
 ただしげ (紀・五)
 全 (龍・國)
 ゆたか (敏・天)
 恵洲 (紀・〇健)
 國護 (紀・敏)
 正明 (紀・孤)
 啓子 (紀・た)
 規夫 (國・ゆ)
 亜也 (紀・敏)
 全 (紀・隆)

一点

テレビ壊る包丁研ぎてぬぐふ汗
 巳之助の梅王声良し夏芝居
 雨ばかり実は色づかずミニトマト
 翡翠は頭でつかちされど疾(と)し
 散歩道庭の紫陽花愛で歩む
 真夜中にふっと目覚める強き雨

千恵 (亜)
 ただしげ (紀)
 全 (び)
 恵洲 (健)
 ゆたか (國)
 國護 (敏)

残雪やアカシアの咲く黒部峽	びん	(○國)
青野来て秘湯の宿の客となる	全	(紀)
梅雨空やからし効かせるサンドイッチ	とみ子	(紀)
夏至の朝目覚ましよりも先に覚め	全	(龍)
舞台から香水の香やかぶりつき	ゆたか	(紀)
八方睨む海老蔵卯の花腐し	盛雄	(紀)
観音竹花咲く庭に浄土思う	雅夫	(紀)
紫陽花の紫映える水しずく	國護	(紀)
梅雨湿り寝かせる墨のやや長く	啓子	(紀)
藤の椅子座敷にでんと鎮座せり	けい子	(紀)
南風吹く鎧の騎士のアマルフィ	全	(紀)
梅雨激し新聞受まで雨合羽	天牛	(紀)

※ ※ ※ ※ ※

【句評】

九点句

あめんぼう水面に映る雲を割る 孤舟

康敏さん・・・水面に映った夏の雲、その上に足長の水馬が乗り雲の影を壊して
います。

敏郎さん・・・あめんぼうの鋭利な描写！

盛雄さん・・・俳句の奥深い所を「あめんぼう」に託されたベテランの作品、下五の雲
を割るが秀逸で「天」にいただきました。

紀久男・・・下五の表現がお見事！

走馬灯たたきに今も夫の靴 とみ子

忠彦さん・・・亡くなったご主人の靴をたたきに置いている奥様の気持ちがよく表れ
ております。

敏郎さん・・・懐かしくも淋しすぎるシーン。

康敏さん・・・思い出深い亡き夫の靴を処分仕切れず未だ玄関に置いたまま。
季語の走馬燈が効いています。

啓子さん・・・この作者の季語の幹旋にはいつも感嘆します。今回の走馬灯、この句
にこの季語を措いてほかにないのではないかと思わされます。

八点句

梅雨籠り壁にルオーのピエロの目 康敏

恵洲さん・・・梅雨籠りの少し陰鬱な風情の部屋にかかるルオーのピエロの絵の眼が
一瞬光ったか、動いたか？少し不気味な雰囲気を感じて。

啓子さん・・・小さめの美術館か、はたまた事務所か。必ずしも明るくはない一角に
存在感のある骨太の筆になるピエロ。その目は黒く縁どられて、梅雨
籠りの中、見詰めれば私は何を思うだろう。

亜也さん・・・上五の気分にルオーの黒く太い線重い色調が呼応。

◎夏立つや鳶の天領広がれり

びん

孤舟さん・・・鳶の逞しさと傍若無人の振る舞い振りが、うまく描かれている。

康敏さん・・・夏になると鳶の縄張りが広がるのか知りませんが、天領と大きく表現したところが面白いです。上五に切れ字「や」を使っていますので、下五は連体形にして「広される」ではどうでしょう。

五郎太さん・・・景が大きく伸びやかな佳句です。ただ6月終わりの句会で「夏立つや」はどうかと思いましたが。鳥の季語、鷺や鷹など大きな猛禽類は冬、百舌やヒヨは秋ですが、鷹の一種でも鳶は一年中上空をゆっくりと舞い、季語ではない。ただ鳶の巢では春。

盛雄さん・・・鳶の天領を詠んだ雄大な一句です。

七点句 五月晴小惑星にアミノ酸

忠彦

龍平さん・・・死と共に死者体内のアミノ酸が無窮宇宙に存在する縁のあるアミノ酸に反応し即刻はやぶさで運ばれる。着いた先がご先祖様が待つ龍宮でした、なんてね。夢を見ましょう。

笑ひ皺増ゆる日もありソーダ水 とみ子

五郎太さん・・・小さな泡が上がってくる、若い時の思い出と結びついている爽やかななソーダ水を飲んでいる。歳をとってくると悲しいこともあるが、楽しい日々もある。笑っているとシワが増えるかもしれないが、季語がよく効いています。

天牛さん・・・笑い皺など考えたこともない!!なる程と思いました。

盛雄さん・・・優しく、愉しい佳句。ユニーク賞です。

雨の夏至煙りて薄き摩耶六甲 健介

ただしげさん・・・雨の摩耶山、六甲山の風情。関東平野に無い趣が感じられる。

◎満持してこの大輪や今朝の百合 堂哉

孤舟さん・・・開花する時期を見計らっていたらしい百合。今朝、その時が満ちたのだ。

亜也さん・・・百合の花の良さはあの大きさ。「満持して」のダイナミズムを

「今朝」がスマートに受け止める措辞の妙。

装束を解きて鵜匠は好々爺 啓子

とみ子さん・・・灯りを頼りに見事に鵜を捌く姿が、想像できました。日常の穏やかな暮らしも垣間見たようにも思えました。

恵洲さん・・・腰蓑を付けた伝統衣装で近寄りがあった鵜匠も平服になるとここにこした普通の老人に。自然でわかりやすい佳句です。小生はその昔、会社関係の旅行で長良川の鵜飼いを鑑賞しました。篝火が盛大に火の粉を撒き散らしながら、上流から鵜舟が下ってくる景色を今も思い出します。鵜匠つて宮内庁の職員らしいですね。

六点句 嘶けば嘶き返す大夏野

孤舟

康敏さん・・・馬が放牧されている広い夏野。「嘶けば嘶き返す」で臨場感が出ました。堂哉さん・・・パーっと青空と白雲、牧場のひろがりや遠近の馬や牛が啄む姿が広まりました。

亜也さん・・・「馬」を出さない巧みさ。

無住寺の池に華やぐ花菖蒲

昇

ただしげさん・住む人のいない寺の池に花菖蒲が咲いている。寂しさと華やかさの対比が良い。

康敏さん・・・今は荒れた無住寺だが昔はそれなりの格式のあった寺だったのでしよう。池の花菖蒲は華やかに咲いているだけに哀れさを感じさせます。

雅夫さん・・・ほっとします。この句のさわやかさに浸っています。

◎何時の世も幽霊は美女夏柳

盛雄

孤舟さん・・・幽霊は死者が成仏し得ないでこの世に現れるもの。「ウラメシヤ」と柳のように風に揺られて現れる美女たち。

千恵さん・・・美女の幽霊と夏柳のコンビネーションがぴったりです。

恵洲さん・・・ちげえねえ。美人だから怖いのですね、なぜか。

堂哉さん・・・コロナ騒ぎで、マスク美女が増えました。幽霊もマスク？

紀久男・・・黒沢明の夢十夜の雪女が思い出されます。岸恵子に惚れられました。

※康敏さん・・・現代俳句協会の歳時記では「幽霊」は夏の季語です。それはともかく幽霊と夏柳は付き過ぎと思います。

参考例「幽霊のみな美しき絵灯籠 小島左京」

五点句

釣忍売る店もある駅の内

五郎太

恵洲さん・・・雨に煙る田舎の小駅に、この風流。いい景色です。

隆さん・・・「駅中に売りに出されし釣忍」でも。

天牛さん・・・都心を離れた中央線の遠い駅でしょうね。

四点句

巳之助・老太郎らの「車引」

豪快に編笠飛ばす夏芝居

紀久男

康敏さん・・・猛暑の季節の興行、若手中心の生きの良い芝居です。

堂哉さん・・・今井さんの元気な一声が聞こえてきました。

◎シーボルトの妻の名つけし額の花

紀久男

孤舟さん・・・シーボルトは紫陽花に妻「お滝さん」の名をつけ西洋に紹介した故事。盛雄さん・・・シーボルトの愛人「お滝さん」が花の名として残っているとは面白いですな。

金婚を祝ふ独酌冷酒で飲む

紀久男

龍平さん・・・フーム 作者を特定出来そうな句。

允章さん・・・奥様は廚で御馳走を造っているのでしょうか。待ちきれずにまずは一杯と飲り始めたところ。良く判る。

天牛さん・・・奥さんそっちのけで独酌！で飲むがいいですね。

踏めば鳴る上り框や梅雨深し

康敏

恵洲さん・・・梅雨さ中の古民家の薄暗い風情を感じます。音でそれを感じさせるところがいい。

啓子さん・・・上がり框とは懐かしい。梅雨で上り框の板が少し膨らんでいるのでしょうか。小学校時代の殊に梅雨が激しく長かった年、湿気を吸って階段の手すりが膨らんでいるのに気づきました。その驚きと感触をま

だ覚えています。

紀久男・・・神田連雀町の甘味処や神保町裏の居酒屋、新橋駅ビルの地下にも一軒ありました。こういった風情のある小店は今も生きながらえているのでしょうか・・・新橋のご主人はNHKテレビ俳句に出たことがある人で、店には黒板があり、「今日の一句」と題して披露しておりました。

◎青葉風鳥の鳴く音に癒されて

ゆたか

孤舟さん・・・森のベンチで読書三昧。青葉を渡る風と鳥の鳴き声に心が和む。
雅夫さん・・・ほっとします。この句の爽やかさに浸っています。

◎白鷺と谷の青さに浸りをり

びん

孤舟さん・・・山間の池の畔。白鷺の白と谷の青さが目に染みる。
忠彦さん・・・白と青の対比と谷の広さを表現した綺麗な句と思いました。
孝岳さん・・・白と青の色彩の対比が作者の句境を鮮やかに表している。清々しい一句ですね。

三点句

ふるさとを出でし日斯くも大夕焼

孤舟

敏郎さん・・・こうした想い出は誰にもあるのでは？

◎紫陽花を手向け祈らんオホーツク

健介

孤舟さん・・・戦時中北方領土で亡くなった方々及び先般の遊覧船事故の犠牲者への鎮魂歌。

ただしげさん・・・オホーツクの惨事、華やかなようでどこか憂いのある花を手向けることにより、悲しみが感じられる。

祝在位バッキンガムに風薫る

千恵

隆さん・・・エリザベス女王の即位の周年は正に「風薫る」。

「ジュビリーを祝う英国風薫る」ではいかが。

昇さん・・・96才にしてカラフルな服装の似合う颯爽とした姿。在位70年、イギリス王室を率いる圧倒的な存在感。誠におめでたい。

ソプラノの余韻楽しむ夏夕べ

ゆたか

隆さん・・・夏夕べとソプラノは合う。「楽しむ」は思わせた方がいい。
「ソプラノの余韻に浸る夏夕べ」でも「楽しむ」様が見える。

◎オンライン顔声有れど心どこ

國護

孤舟さん・・・「オンライン」の様子をうまく描いているが、季語がない。
ただしげさん・・・オンラインによるコミュニケーションを上手く捉えていて面白い。

どなたかな深いマスクとサングラス

國護

天牛さん・・・私もバス停で恵洲さんに尋ねられたことがあります。その時は冬の帽子とマスクでした。

※康敏さん・・・マスク(冬)とサングラス(夏)の季重なり？花粉症でマスクをする人が多いので「春のマスク」を季語にしようとの話を聞いたことがあります。したが、今や一年中マスク。

「もうマスク季語じゃないよね日の盛」。中には「片陰にコロナマスクの六地藏」と工夫している人もいます。いずれにせよ、早く「マスク」が冬の季語として復活して欲しいものです。

仕事師の鮎竿掛かる山飯場

びん

恵洲さん・・・飯場で働く人が持つて来て休日を使う釣り竿。きつと永年使いこなされた手垢でいい色になっているに違いない。

盛雄さん・・・山深い温泉に出向いた折に見掛けた景でしようか。釣り人の意気がにじむ佳句。

◎菩提樹の花の雨降る墓掃除

啓子

孤舟さん・・・菩提樹は釈尊がその下で悟りをひらいたと言われる木。仏教的な香りの「墓」とよく似合う。但し「菩提樹の花」は夏、「墓掃除」は秋の季語。

千恵さん・・・菩提樹の花を片付けながらの墓掃除はきつと楽しかったことでしょう。堂哉さん・・・良い所にお墓がありますね。我が家の墓掃除は炎天下です。

※康敏さん・・・「墓掃除」は俳句では盆に行くこととして秋の季語で、「菩提樹の花」(夏)と季重なりです。「菩提樹の花の雨降る父祖の墓」では。

二点句

猿之助・右近らの「猪八戒」

京劇の殺陣に負けじと夏歌舞伎

紀久男

天牛さん・・・歌舞伎もだいぶ変わってきましたからね。

忘れ物二つ戻りし初夏の旅

五郎太

隆さん・・・忘れ物はいつも青息吐息。出てきた喜びが「初夏」にマッチしている。

しばしの間蝦蛄の殻むく手眺む

五郎太

啓子さん・・・最近はその簡単には殻付き蝦蛄も手に入りませんが、この日の蝦蛄は何処産でしょう。東京でも嘗て大森海岸が機能していた頃、等々力あたりはまだ生海苔や蝦蛄を担いだ行商の方が来てくれました。

今年また白き紫陽花咲かす家

千恵

忠彦さん・・・白き紫陽花は良く目立ちます。軽く表現するところが上手いと思いません。

山桜桃白い花から赤い実へ

ただしげ

五郎太さん・・・これをユスラウメと読むのは難しい。今の季節、ヤマモモ(楊梅と書く)も背の高い木に小さな赤い実をつけ、道を汚す。梅と桃と桜と區別をしているのか否か、日本語は面白いですね。

肌寒い小雨降る日に梅雨の入り

ただしげ

龍平さん・・・昨今季節と温度がズレてきたかトシのせいか、朝の公園散歩は年中大きめの団扇を持参。妙齡マダムに面白がられワンちゃんにジャレられ交友関係増加中。

わが狭庭揚羽蝶きて舞いて去る

ゆたか

天牛さん・・・庭を一巡したのでしよう。それを舞うとはいいいですね。

液晶画面いよいよ見辛く梅雨に入る

恵洲

健介さん・・・左右の眼に3つの病を抱えていて謂わば三重苦の私にとっては、まさに切実な問題で、こういう句を詠もうとしたことがあり、まさに同感です。

※康敏さん・・・後期高齢者の共感を呼ぶ句ですが、惜しいことに「中七」が字余りでリズムが良くありません。「いよいよ見辛く」とすれば、上五の字余りが

中七・下五で調整されます。中七は七音を守るべしと云うのが俳句の定石です。

御開帳香炉の煙り山緑

國護

敏郎さん・・・信州善光寺ご開帳の光景か？

◎雄は飛び雌は待つてる螢かな

正明

孤舟さん・・・闇に飛び交う螢は雄で、雌はひたすら水辺の草で雄の訪れを待っている。

騒がしや溪流釣りの解禁日

啓子

ただしげさん・・・溪流釣りの解禁日、解禁を待ちかねた人々で、いつも静かな溪流が賑わっている。その様子を上手く表現している。

郵送で祓え受くるも夏越かな

亜也

隆さん・・・足腰の弱さか、コロナか、夏越しも家でいいですね。
「郵送で祓え受けたる夏越しか」と言い切ってはいかが。

一点句

テレビ壊る包丁研ぎてぬぐふ汗

千恵

亜也さん・・・意味不明の取り合わせながら、不思議なポエジーあり。

真夜中にふっと目覚める強き雨

國護

※康敏さん・・・季語がありません。夏の深夜を意味する「夜半の夏」（よわのなつ）と云う季語があります。「夜半の夏強き雨にて目覚めけり」では。

※句会でも数名から無季語との指摘がありました。

残雪やアカシアの咲く黒部峡

びん

※残雪（春） アカシア（花・夏） 季重なりです



青葉会予定

令和四年七月二十八日（木）

会場：竹橋毎日新聞社ビル

赤坂飯店竹橋店

時間：十二時～十五時

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。投句締切：七月二十六日（火）中。

参加のご意向はお早めにお願い致します（赤坂飯店に人数を伝える要あり）。**ご参加のご意向**、投句は今井宛 FAX か郵送、或いは星田メール (keiko-reve@c07.itscom.net) までお願い致します。因みに昨今の郵便は三日かかります（土日の配達はないので**ご注意を!**）



青葉会報

一、今回は梅雨明け間近の猛暑にも拘わらず、長老のびんさん始め二名が出席。投句はお達者な天牛さんら三名、赤坂飯店の上海料理、紹興酒に舌鼓打ち乍ら、三時間の制限も五郎太さんのスピーディな仕切りで、ご覧のように、連句で鍛えられたとみ子さん、シャープな康敏さん、景の描写に佳句の目立つびんさんが好成績でした。

話題は、難病を克服された恵洲さん、震度6の能登半島の先端 珠洲近くの弘子さんの

出身地は無事とのこと等。

回覧は、久しぶりの社友会月例会の月 講師の伊勢雅臣氏（筑波大講師）のレジメと日
経新聞に掲載された丸紅の全面広告等。

びんさんから山梨白州町の純吟「七賢」の寄贈あり、殆ど小生が賞味して仕舞いまし
た。

二、 関係者近詠

余命てふ命始まる花便り

眞希子

野遊びにトリスの小瓶三鬼の忌

陽亮

「所存」などと背伸びしたくて入学子

全

また一人幽冥異に花の頃

全

灯しつも暗き聖堂花ミモザ

全

日に一つ悔いを重ねて四月尽

全

ねんごろに夫の納むる内裏雛

全

居眠りの不意に覚めたる藤の雨

全

鳩の目に戦争近き春の空

弘子

猿之助・愛之助・松緑の「天一坊」

全

低く咲くすみれ園児のワゴン寄す

全

沙翁劇思はず問答清明なり

紀久男

胸高く稚を抱く父初桜

全

父母の忌や住職父子と花見酒

全

ユーミンが春よと歌ふ桃摘花

全

父母の忌や住職父子と花見酒

全

スニーカーの靴底白き諸葛菜

全

父母の忌や住職父子と花見酒

全

——「森の座」七月号（横澤放川選）

紫陽花や雨音柔（や）はき二月堂

盛雄

蔵書整理遅々と進まず三尺寝

健介

酒蔵に寄りそう日々や七変化

全

紫陽花を手向け祈らんオホーツク

全

人麻呂と見し隠り国の四葩かな

全

諍ふな紫陽花涙の色となる

全

焼野原七十七年前の夏

全

シーボルトの妻の名つけし額の花

紀久男

酒都西条飲み放題の蔵祭

全

卯の花腐し手持無沙汰の觀光地

全

夕焼けの摩耶ケーブルに二人きり

全

——「きさらぎ句会」六月

風薫るベンチに読書する女

允章

山百合のすつくと立ちて孤高の香

全

梅雨明けや老骨きしませクラブ振る

全

三、 孤舟選者近詠

残る鴨しづかに己が身を流す

蒼穹の傾くほどに半仙戯

花に覚め星に眠りて峽の空

さへづりの輪唱となる禁猟区

螢烏賊煌めき星は座を組めり

——「爽樹」誌7月号より

令和四年七月十日

紀久男 記